

新たな時代を豊かに生きる生徒の育成
ーファシリテーションに着目した指導による
探究的な学びの実現を目指してー

下田 啓介*・榊 隼弥**

(2023年11月15日 受理)

Developing Students Able to Live Well in a New Era: Achieving Inquiry-Based Learning
through Instruction Focused on Facilitation

SHIMODA Keisuke , SAKAKI Junya

要約

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)では、Society5.0時代における教師に必要とされる資質・能力として、新たにファシリテーション能力が求められている。これは、教師が生徒の伴走者として、ファシリテーション能力を備え、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実させ、予測困難な時代を豊かに生きていくために必要な資質・能力の育成を目指すことにほかならない。

本校では、2018年から「新たな時代を豊かに生きる生徒の育成」を研究主題として設定し、Society5.0の時代を豊かに生きていくために必要な資質・能力の育成に努めてきた。また、これまでの研究を踏まえ、生徒を主語とした探究的な学びの実現を目指しながら、育成を目指す資質・能力がよりよく育まれるように研究・実践を重ねてきた。本稿は、その成果について報告するものである。

キーワード : ファシリテーションに着目した指導、探究的な学び

Society5.0で求められる資質・能力

* 鹿児島大学教育学部附属中学校 教諭

** 鹿児島大学教育学部附属中学校 教諭

1. 副主題設定の理由

1.1 社会や教育の動向より

令和4年6月、総合科学技術・イノベーション会議から「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」(以下、「政策パッケージ」)が発出された。政策パッケージは、第6期科学技術・イノベーション基本計画を受け、「一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を実現できる社会」としてのSociety5.0の実現に向け、「アフターコロナという時代の転換期にある今、すべての子供の可能性を最大限に引き出す教育・人材育成システムの抜本的な転換が急務」であることを述べている。また、学校教育には、探究力、協働体制、子供の主体性に重点を置いた「個別最適な学び」や「協働的な学び」の一体的な充実を通して、多様性を重視した教育・人材育成に取り組むことを求めている。

「個別最適な学び」や「協働的な学び」については、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』(以下、「答申」)で詳細が語られている。答申は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を踏まえ、「各学校段階における子供の学びの姿や教職員の姿、それを支える環境について、「こうあってほしい」という願いを込め、新学習指導要領に基づいて、一人一人の子供を主語にする学校教育の目指すべき姿」を示している。具体的には、一人一人の子供を主語にする学校教育を目指すために、教師は、子供たちを支える伴走者であること、そして、Society5.0時代における教師にとって必要とされる資質・能力として、新たにファシリテーション能力が求められている。ファシリテーション能力が求められている背景として、工藤(2021)は、「従来の知識伝達型の教授法から子供が主体的に学び、行動を起こせるように伴走者として促進するファシリテーション能力も求められる」と考察している。以上のような社会的要請や教育の動向を踏まえ、教師は、伴走者としてのファシリテーション能力を備え、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を一体的に充実させ、「一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を実現できる社会」としてのSociety5.0の実現に向け、生徒の資質・能力を育成していく必要がある。

1.2 研究の経過より

本校では研究主題にある「新たな時代」と「豊かに生きる生徒」を以下のように捉えている。

「新たな時代」とは

Society5.0と呼ばれる、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させた超スマート社会において、人間がAIやデータの力を活用する資質・能力や人間の強みを生かし、多様な人々と関わり合いながら自らの未来を切り拓いていくことが求められる時代

「豊かに生きる生徒」とは

他者(ヒト・モノ・コト)を理解し共存を図り、一人一人の価値観のもと、自分で満足できる幸せの形(感情的な豊かさ、時間的な豊かさ、場所に関する豊かさ、分かちあいの豊かさ)を見つけ、実現できる生徒

「Society5.0 に向けた人材育成」(文部科学省、2018)の中で「Society5.0 で共通して求められる力」として、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」、「科学的に思考・吟味し活用する力」、「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」が挙げられている。本校は、「Society5.0 で共通して求められる力」を「Society5.0 で求められる資質・能力」として捉え、「Society5.0 で求められる資質・能力を育成する三つの活動」(表1)(以下、「三つの活動」)を各教科の学習活動の中に位置付けることで「Society5.0 で求められる資質・能力」の育成に取り組んできた。

表1 「Society5.0 で求められる資質・能力を育成する三つの活動」

読み解き・対話する活動	情報(文章や式、芸術なども含む)を、その文脈や関係性などを含めて正しく理解したり、他者と対話したりして、自己の考えを広げ深めるための活動
思考・吟味する活動	問題(課題)を解決して得られたモノ等、またはその過程で得られた考え方等を振り返り、よりよくするための活動
価値を見つけ・生み出す活動	問題(課題)を解決して得られた解(唯一解、最適解)や創り上げた作品等をもとに、目的に応じて多面的・多角的に評価したり、それらを生かして新たな価値を創造したりするための活動

また、「三つの活動」を通して、育成を目指す生徒像を以下のように捉えた。

- ① 自他のためによりよく問題(課題)を解決することができる生徒
- ② 自分のよさ(アイデアや考え方、情報、気持ちなど)を表現し、他者に伝えることができる生徒
- ③ 問題(課題)解決で得られたモノ(アイデアや考え方など)を多面的・多角的に考え、他の場面で生かすことができる生徒
- ④ 知・徳・体にわたる「生きる力」がバランスよく育まれた生徒

上述した生徒像を目指し、1年次は、各教科において「三つの活動」を充実させる手立てを講じ、「Society5.0 で求められる資質・能力」と各教科で育成すべき資質・能力を育むとともに、その関連性を明らかにしてきた。2年次は、1年次の研究の成果と課題を踏まえ、学校の教育目標を始め、各学年や各教科等の目標を資質・能力の三つの柱で整理し、「三つの活動」の実践を進めた。また、各教科等のグランドデザインを作成してカリキュラム・マネジメントの取組を行い、授業改善を図った。その結果、2年次では、授業実践・授業改善を進める中で、「学びに向かう力、人間性等」を育成する教師の視点が十分でなかったことが課題として挙げられた。この課題が生じた理由は、「三つの活動」を充実させる手立てを講じたが、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の育成に教師の意識が偏ってしまったためであった。そこで、3年次は、「学びに向かう力、人間性等」において観点別学習状況の評価として見取ることのできる「主体的に学習に取り組む態度」の育成と評価に重点を置いた。事前のアンケート調査によると、本校生徒の課題は、「主体的に学習に取り組む態度」における「自らの学習を調整しようとする側面」であることが分かった。そこで、自己調

整学習理論における自己調整学習方略を「学習を調整する視点」(表2)として捉え直し、「学習を調整する視点」を活用した評価の工夫に取り組み、指導と評価の一体化を図るようにした。

表2 「学習を調整する視点」の内容

視点	内容	例
コンテンツの視点 (認知的な視点)	学習内容そのものに注意を向けさせる視点	繰り返し読み書きしたり、自主的に質問や調査をしたりして獲得した知識や自分の考えを、既習事項と結び付けて整理・要約したり、確かめたりして、より深い理解やよりよい考えにつながられるようにすること
プロセスの視点 (メタ認知的な視点)	学習の活動状況や理解状況に注意を向けさせる視点	目的や目標をもって、解決方法の計画を立て、必要に応じて確認・修正しながら学習を進め、自己の学習を省みて、学んだことを次に生かすつながられるようにすること
リソースの視点 (リソース管理の視点)	自分が使うことのできる資源(リソース)を有効に活用させる視点	必要に応じて他者へ援助を求めるなどして、どのような課題にも努力し続け、他者と関わりながら学びを深められるように、学習の計画や環境を整え管理できるようにすること

4年次は、中学校学習指導要領の全面実施を受け、研究・実践の成果を基に、授業デザインの在り方をまとめた「資質・能力を育む授業デザインハンドブック～目標と指導と評価が一体化した授業デザインの実現に向けて～」(以下、「授業デザインハンドブック」)の作成に取り組んだ。「授業デザインハンドブック」の作成を通して、教師は、生徒の学習の状況や授業デザインの在り方を振り返ったり、学校の教育目標や育成を目指す資質・能力と照らし合わせながら、指導の方法を評価・改善したりして、授業実践につなげることができた。しかし、4年次の課題として、教師の指示が中心となって展開される、教師主導に近い授業もあったのではないかとの意見が挙がった。「教師の視点」に偏りがちであった授業を、学び手である「生徒の視点」から捉え直し、「答申」が目指している、生徒を主語にする学びを展開していく必要があると考えた。

合田(2022)は、「『主語を子どもにした学び』とは、「子どもを学びに合わせるのではなく、学びを子どもに合わせる」ことにほかならない。…(中略)…探究的な学びはその重要な要素であるとの認識を教育界や保護者含め社会で共有することが必要である」と述べている。また、田村(2022)は、「学びを「探究モード」に変革していかなければならない。身近な社会の問題の解決に向けて、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動する力が求められている。そして、そこでは、絶対の正解よりも、納得解や最適解が期待されている。そうした学習の繰り返しの中でこそ、未来社会を創造する主体が育っていくのではないだろうか。」と述べている。合田(2022)、田村(2022)が述べている考えから、生徒を主語にする授業は、教師の指示を中心に展開される教師主導の授業では実現が

難しいと推察される。生徒が主体となり、生徒自身が納得解や最適解を導き出せるように、教師は、より「生徒の視点」から授業デザインに取り組み、授業において生徒の主體的な学びの伴走者として、支援的な役割を果たしていかなければならない。さらに、田村(2022)は、「探究」については、「総合的な学習の時間」だけが行うわけではなく教科においても必要になってくる。…(中略)…教科における「探究」は、各教科固有の学びを確かに歩みながら進めることが欠かせない。」と述べている。そこで、本校が取り組んでいる「三つの活動」が、生徒にとってより「探究的な学び」となるように指導の工夫をして、「三つの活動」の充実を図っていけば、育成を目指す資質・能力を育んでいくことができるとともに、4年次の課題の解決に迫ることができるのではないかと考えた。

これらの考えから、5年次の研究を、「探究的な学び」に着目して進めていくことにした。

1.3 生徒の実態より

本校は、3年次の研究以降、「学習を調整する視点」を取り入れた「三つの活動」を重視しながら、授業に取り組んできた。5年次の研究を進めるにあたり、櫻井(2020)に記されている調査項目を基にして、本校が3年次に作成したアンケートを改めて実施した。アンケートを実施することで、生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」について、これまでの継続した取組の実態を把握することにした。

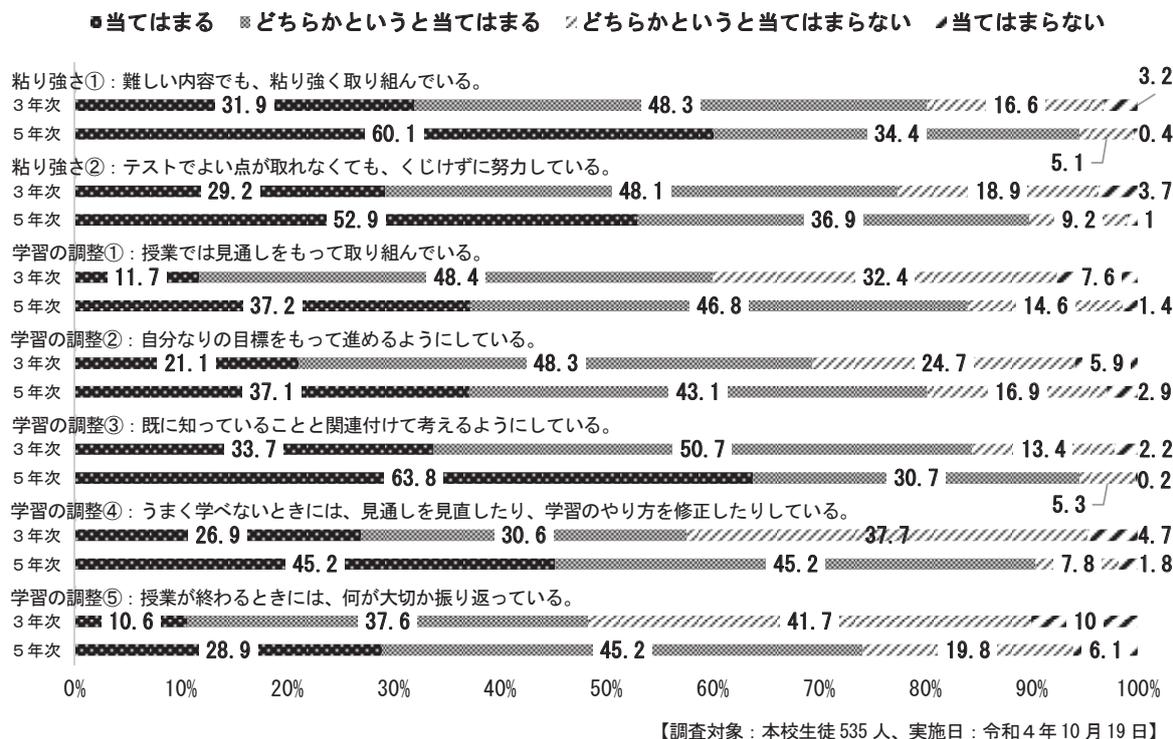


図 1 「主体的に学習に取り組む態度」についてのアンケート調査の結果

図 1 の調査結果より、5年次では、「粘り強さ①、②」について約 9 割の生徒が「当てはまる」、「どちらかという当てはまる」と回答した。また、3年次のアンケート結果と比較すると、「粘り強さ①、②」において、「当てはまる」と回答した生徒が大幅に増加していた。

「学習の調整」は、5年次の結果から、特に「学習の調整③」について、「当てはまる」と回答した生徒は半数以上まで増加しているとともに、「どちらかという当てはまる」と回答をした生徒も含めると約9割の生徒が肯定的に回答した結果になった。また、「学習の調整①、②、④、⑤」についても、「当てはまる」と回答した生徒は、大幅に増加しているとともに、「どちらかという当てはまる」の回答まで含めると、「学習の調整①」は84%、「学習の調整②」は80.2%、「学習の調整④」は90.4%、「学習の調整⑤」は74.1%と、高い値となっている。

以上の結果から、3年次から継続して取り組んでいる「学習を調整する視点」を取り入れた「三つの活動」は、本校生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の育成において、一定の効果があったと考えられる。多くの生徒は、授業において粘り強く取り組んだり、自らの学習を調整しようと試行錯誤していたりして、「粘り強さ」や「学習の調整」は、本校生徒の強みやよさになっていると考察できる。

生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の高まりは、「もっと知りたい」、「解決したい」という学びの意欲を支えるものである。生徒が、自身の知的欲求を満たすことに向けて、粘り強く学習に取り組んだり、自らの学習を調整しようと試行錯誤したりする場面において、教師は、生徒が主体的に学ぶ姿を支える立場で関わるのが大切であると考えられる。

「答申」では、一人一人の子どもを主語にする学校教育の目指すべき姿が具体的に示されるとともに、Society5.0時代における教師に、ファシリテーション能力が新たに求められている。また、日本経済団体連合会(2020)は、「Society5.0に向けて求められる初等中等教育改革第二次提言」において、「STEAM教育・探究型学習において教員は、生徒の能力や関心に応じてテーマを設定することが重要であり、ファシリテーターとして授業を組み立てる能力が求められる」と述べている。「答申」及び「提言」から、ファシリテーションは教師に求められる資質・能力であるとともに、「探究的な学び」にも深い関連性があると考えられる。したがって5年次は、各教科の特質や本校生徒の実態に合わせた、ファシリテーションに着目した指導や支援を工夫することで、「三つの活動」を充実させ、生徒の「探究的な学び」の実現を目指していく。

以上のことから、5年次の副主題を「ファシリテーションに着目した指導による探究的な学びの実現を目指して」と設定した。

2. 研究の構想

2.1 これまでの研究から

3年次は、教師が「学習を調整する視点」をもって、「三つの活動」を工夫し、生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の育成に取り組んできた。しかし、3年次の研究を通して、教師のみが「学習を調整する視点」を意識して授業をデザインするだけでは不十分であったとの課題も挙げられた。

「学習を調整する視点」は、自己調整学習理論における自己調整学習方略を網羅的に捉え直したものであることから、方法知的な要素を含んでいるものと捉えることができる。そこで、4年次は、

教師が「学習を調整する視点」を生徒と共有したり、活用の仕方を学ばせたりした上で、「三つの活動」に取り組んだ。「学習を調整する視点」を教師と生徒で共有したり、活用の仕方を学ばせたりすると、生徒は、これまで以上に意図的に学習内容そのものや学習の活動状況、理解状況に注意を向けたり、自分が使うことのできる資源(リソース)を活用したりするようになってきた。つまり、生徒が「学習を調整する視点」を基に、自らの学習状況を把握したり、自らの学習の進め方について試行錯誤したりするようになることで、「三つの活動」が充実し、生徒が主語となる「探究的な学び」の実現を支えることが期待されると考える。

2.2 本校が目指す「探究的な学び」とは

本校では以下のように、「探究的な学び」を具体的に捉え、その実現を目指していくことにした。

本校が捉えた「探究的な学び」

生徒が粘り強く試行錯誤しながら、身に付けた資質・能力を活用・発揮し、課題(問題)を見付け、解決していくことを発展的に繰り返す学び

このように捉えた理由は次の二点である。

一点目の理由は、本校生徒の強みやよさである、「粘り強く学習に取り組むこと」、「自らの学習を調整しようと試行錯誤すること」は、「探究的な学び」の実現を支える重要な要素であると考えたからである。生徒は、「学習を調整する視点」を活用することで、意図的に学習内容そのものや学習の活動状況、理解状況に注意を向けようとしたり、自分が使うことのできる資源(リソース)を活用しようとしたりする「主体的に学習に取り組む態度」を基盤にして、探究的に学んでいくことができるようになると考えた。

二点目の理由は、「探究的な学び」の実現には、探究的な学習の過程を踏まえて、その質的向上を図ることで、育成を目指す資質・能力を育成していくことができると考えたからである。学習指導要領解説総合的な学習の時間編では、探究的な学習の「深い学びの視点」について、「探究的な学習の過程を一層重視し、これまで以上に学習過程の質的向上を目指すことが求められる。探究的な学習の過程では、各教科で身に付けた「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を活用・発揮する学習場面を何度も生み出すことが期待できる。」と述べられていることから、本校が捉える「探究的な学び」の視点として取り入れることは重要であると考えた。

2.3 「ファシリテーションに着目した指導」について

石井(2022)は、「どれだけ「学び」に光が当たっても、大人の責任を放棄しない限りは、「教えること」に限らず、教師、あるいは子どもの学びと成長を支援する他者の仕事はなくなりはない。…(中略)…「子ども主語」の学びや授業を追求するからといって、それを支援する「教師主語」の授業研究をおろそかにしてはならない。」と述べている。石井(2022)の考えを踏まえると、5年次の研究において支援する教師の役割は、生徒が主語となる「探究的な学び」を実現するために、より一層重視されなければならない。つまり、教師は、生徒の学びを支えるファシリテーターとして「三つの活動」の充実を図り、「探究的な学び」の実現を目指していくことが大切である。

堀(2021)は、ファシリテーションについて、《ファシリテーターに求められるスキルは、多岐にわたり、活用分野によっても変わってきます。》と述べ、ファシリテーションのスキルを活用分野における共通項として、四つに整理している(表3)。

表3 堀(2021)のファシリテーションのスキル

場のデザイン のスキル	何が目的なのか、どんな方法で行うのか、誰と行うのかなどを決め、また、目標の共有や意欲の醸成をするなど、ファシリテーションを行うための段取りや準備に関わる要素からなるスキル
対人関係のスキル	意見や考えを出し合い発散させ、理解と共感を深めながら、アイデアを広げていくスキル
構造化のスキル	発散した意見や考えを収束に向けて明確にしたり、整理したりするスキル
合意形成のスキル	結論の方向性を絞り、合意を図ったり決定したりするスキル

しかし、堀(2021)のファシリテーションのスキルは、会議での応用を念頭に整理されたものであることから、授業においてそのまま用いることは適切ではないと考える。そこで、堀(2021)のファシリテーションのスキルを授業場面でも効果的に活用できるように、諸富(2020)の考えを参考にする。諸富(2020)は、教育分野でのファシリテーターの役割として、《子どもたちが自分で考え、ともに話し合い協力して課題の発見や解決に向けて取り組んでいくプロセスを支え、促進するのが教師の仕事とし、教師の役割がティーチングから子ども一人ひとりの資質・能力を最大限に引き出すファシリテーションに変化している》と述べている。本校は、堀(2021)と諸富(2020)の考えを参考に、ファシリテーションのスキルを「ファシリテーションに着目した指導」として以下(表4)のように捉え直した。

表4 「ファシリテーションに着目した指導」の内容

学習の場のデザインに 関わる指導の工夫	課題(問題)を見付けたり、課題の解決に必要な知識や技能を身に付けたりする、一単位時間や単元・題材のまとまりの指導計画、学習環境などに着目した指導の工夫
対人関係に関わる 指導の工夫	多様な意見や考えを見出したり、見出した意見や考え方を認め合ったりする、質問・傾聴に着目した指導の工夫
思考の整理に関わる 指導の工夫	多様な意見や考えの整合性・根拠の妥当性を明確にする、構造化・視覚化に着目した指導の工夫
解決・決定に関わる 指導の工夫	多様な意見や考えに納得したり、最適な判断をしたりしながら、課題(問題)の解決を図れるようにする、合意形成や意思決定の仕方に着目した指導の工夫

2.4 「三つの活動」を充実させる「ファシリテーションに着目した指導」と「探究的な学び」の関係について

「三つの活動」を「ファシリテーションに着目した指導」によって展開していくと、生徒は、より探究的に学びながら、「Society5.0 で求められる資質・能力」や各教科で育成すべき資質・能力をよりよく身に付けていくようになると思う。

「読み解き・対話する活動」を「ファシリテーションに着目した指導」によって展開すると、生徒は、課題(問題)の解決につながる情報(文章や式、芸術なども含む)を自ら探して取り出したり、収集したりするようになる。また、生徒は、情報(文章や式、芸術なども含む)の文脈や関係性を正しく理解したり、他者と対話したりする際に、「ファシリテーションに着目した指導」によって、多様な意見や考えに触れやすくなることで、自身の意見や考えとの「ずれ」や「隔たり」を見付けたり、感じたりするようになる。そして、教師は、生徒が見付けたり感じたりした「ずれ」や「隔たり」が、切実な課題(問題)となるように指導したり支援したりすることで、生徒は、考えを広げたり深めたりしながら、課題(問題)を自ら見付けることができるようになると考えられる。

「思考・吟味する活動」を「ファシリテーションに着目した指導」によって展開すると、課題(問題)を解決して得られるモノが、主観的・感覚的なモノではなく、客観的でより信頼性の高いモノとして表出するようになる。また、課題(問題)解決の過程において、対象を分析的に捉えたり、複数の対象の関係性について考えたりするようになる。そして、課題(問題)を解決して得られたモノ等、その過程で得られた考え方を振り返る際に、生徒は、多様な意見や考えと自身の意見や考えを照らし合わせることで、課題(問題)がより鮮明になったり、課題(問題)が更新されたりして、新たな課題(問題)に気づきやすくなると考えられる。

「価値を見つけ・生み出す活動」を「ファシリテーションに着目した指導」によって展開すると、生徒は、多様な意見や考えを見出す過程において、自他の意見や考えに納得したり、最適な判断をしたりしながら、課題(問題)の解決を図り、解(唯一解、最適解)を得たり作品を創り上げたりするようになる。また、多様な意見や考えに納得したり、最適な判断をしたりしながら課題(問題)の解決をしていく過程において、生徒は、より「知識及び技能」を活用したり、「思考力、判断力、表現力等」を発揮したりするようになる。このような学びの過程は、生徒の資質・能力を高めるとともに、新たな価値を創造する学習場面に、大きく寄与するものになる。さらに、生徒は、目的に応じて多面的・多角的に評価する学習場面において、評価した内容や情報を整理したり、再構成したりすることで、新たな価値をより豊かに創造したり、新たな課題(問題)の発見に結び付けたりするようになると考えられる。

以上のように、「三つの活動」を「ファシリテーションに着目した指導」によって展開していくと、生徒は、粘り強く試行錯誤しながら課題(問題)の解決に向けて、探究的に学び続けるようになることが期待される。また、それと同時に、「ファシリテーションに着目した指導」によって「三つの活動」が充実することで、「Society5.0 で求められる資質・能力」とともに、各教科で育成すべ

き資質・能力が育成され、学校の教育目標の達成に迫ることができ、本研究で目指す新たな時代を豊かに生きる生徒の育成に向かうことができると考える。

2.5 研究の構想図

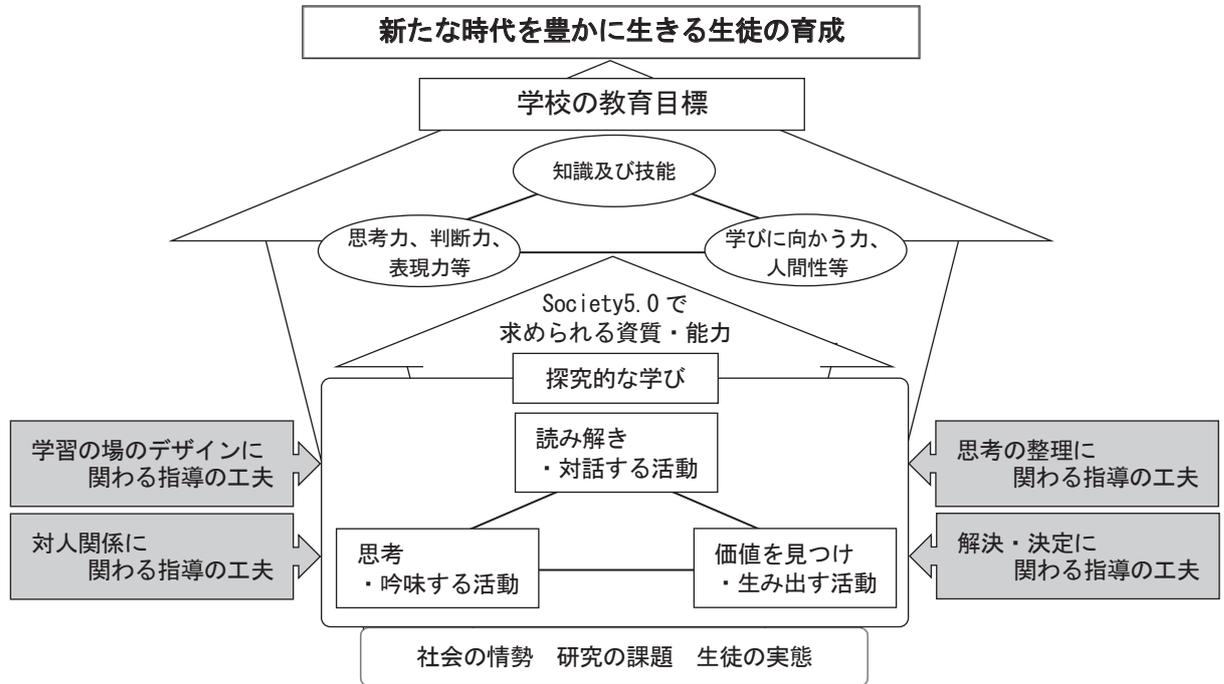


図2 研究の構想図

3. 研究の内容

3.1 学習の場のデザインに関わる指導の工夫

「探究的な学び」は、課題(問題)解決的な学習が発展的に繰り返されていくことによって、その質が高まり高度化され、充実していく。しかし、適切な難易度の課題を設定できず、達成が易し過ぎてしまったり、反対に難し過ぎたりして、課題に取り組みにくさを感じてしまう生徒もいる。また、課題(問題)解決を進めていくために必要な知識や技能が、生徒に十分に身に付いていない場合なども考えられる。そこで教師は、一単位時間や単元・題材のまとまりの指導計画を工夫したり、学習環境を生徒が学びやすくなるように整えたりする。その際、教師は、生徒の実態や学習状況を的確に把握し、把握した内容を踏まえて指導計画を修正したり、学習環境を調整したりする。このような指導の工夫に取り組むことで、生徒は、自身の課題意識を継続させて、よりよく課題(問題)解決に取り組もうとしたり、新たな課題を見付けたりするようになり、「探究的な学び」の実現につながることを期待される。

3.2 対人関係に関わる指導の工夫

対人関係に関わる指導の工夫では、質問や傾聴に着目した指導の工夫に取り組む。例えば、質問の内容、視点、方向、質問の形式などを工夫することで、生徒に多面的・多角的な意見や考えを引き出させることができる。引き出された意見や考えは、生徒の課題(問題)解決に必要な情報になっ

たり、新たな気づきを促すきっかけになったりする。また、傾聴には、教師と生徒あるいは生徒同士の理解と共感を深める効果がある。生徒は、互いの情報、知識、感情、意思などを傾聴によって受け止めたり、分かち合ったりすることで、意見や考えに相違があっても、単に否定するのではなく、批判的思考などによって議論を展開し、自他の意見や考えのよさ、価値に気付くことができるようになる。このように、質問・傾聴に着目した指導の工夫によって、多様な他者とのコミュニケーションが促されて豊かになることで、「探究的な学び」の実現につながることを期待される。

3.3 思考の整理に関わる指導の工夫

思考の整理に関わる指導の工夫では、構造化・視覚化に着目した指導の工夫に取り組む。構造化には、多様な意見や考えを論理的に整理する効果がある。例えば、課題(問題)の解決に向けて必要な考えや情報であれば残し、不必要なものと判断されれば取り下げたり修正したりする。また、無意識のうちに省略したり歪曲してしまったりした意見や考えはないかなどを確認し、根拠と結論が結びついているかの妥当性を明確にすることができる。さらに、意見や考えの関係性の全体像を把握するためには、視覚化が重要である。意見や考えの関係性が視覚化されると、意見や考えが発信者から切り離されて、客観的に見ることができたり、意見の反復や堂々巡りの議論を防いだりする効果がある。また、視覚情報が創造力を刺激し、議論に広がりを与えるようになる。このように、構造化・視覚化に着目した指導の工夫によって、生徒が、課題(問題)の解決に向けて多様な意見や考えを整理したり、根拠の整合性や妥当性を明確にしたりすることで、「探究的な学び」の実現につながることを期待される。

3.4 解決・決定に関わる指導の工夫

解決・決定に関わる指導の工夫では、合意形成や意思決定の仕方に着目した指導の工夫に取り組む。課題(問題)を解決していく過程では、多様な意見や考えの中から、その場の状況に応じて適切と判断されるものを選択したり、多様な意見や考えを組み合わせたりしなければならない。そして、納得できる決定をしたり、最適と考えられる判断をしたりすることで、課題(問題)を解決していくことが重要である。そこで、合意形成や意思決定の仕方に着目して、よりよく課題(問題)が解決できるようにする。例えば、合意形成の仕方を工夫することで、数的に優位な意見や考えのみを採用するのではなく、少数の意見がもつよさや価値を課題(問題)の解決に生かすことができる。また、意思決定の場面などにおいて、選択肢や選択基準などを工夫して、生徒自身の意見や考えが意思決定に反映されるようにすることで、生徒は、納得感をもった課題(問題)の解決につなげることができるようになる。生徒は、納得感をもって解決に至った過程を振り返ったり、振り返った内容を基に、新たに課題(問題)を見出したりすることで、学びの有用性や自己の成長を感じ、新たな課題(問題)に意欲的に取り組むようになり、ひいては、「探究的な学び」の実現につながることを期待される。

4. 研究の成果と課題

4.1 研究の成果と課題をまとめるにあたり

5年次は、各教科の特質に応じて、「三つの活動」を「学習の場のデザインに関わる指導の工夫」、「対人関係に関わる指導の工夫」、「思考の整理に関わる指導の工夫」、「解決・決定に関わる指導の工夫」によって展開してきた。しかし、これらの指導の工夫に取り組むだけでは、生徒の学びは一過性のものになってしまい、本校が目指す「探究的な学び」の実現にはつながりにくいとする。5年次の研究を通して、今後、更に生徒自身が、学びの意欲を継続させ、その過程を通して、育成を目指す資質・能力をよりよく育んでいくことができるように、教師は、「ファシリテーションに着目した指導」に重点を置き、授業改善を進めていく必要があると考える。そして、本校研究の主題である「新たな時代を豊かに生きる生徒の育成」を目指していくようにする。

そこで、5年次の研究の成果と課題を整理し、今後の研究・実践につなげていくために、アンケート調査を実施した。

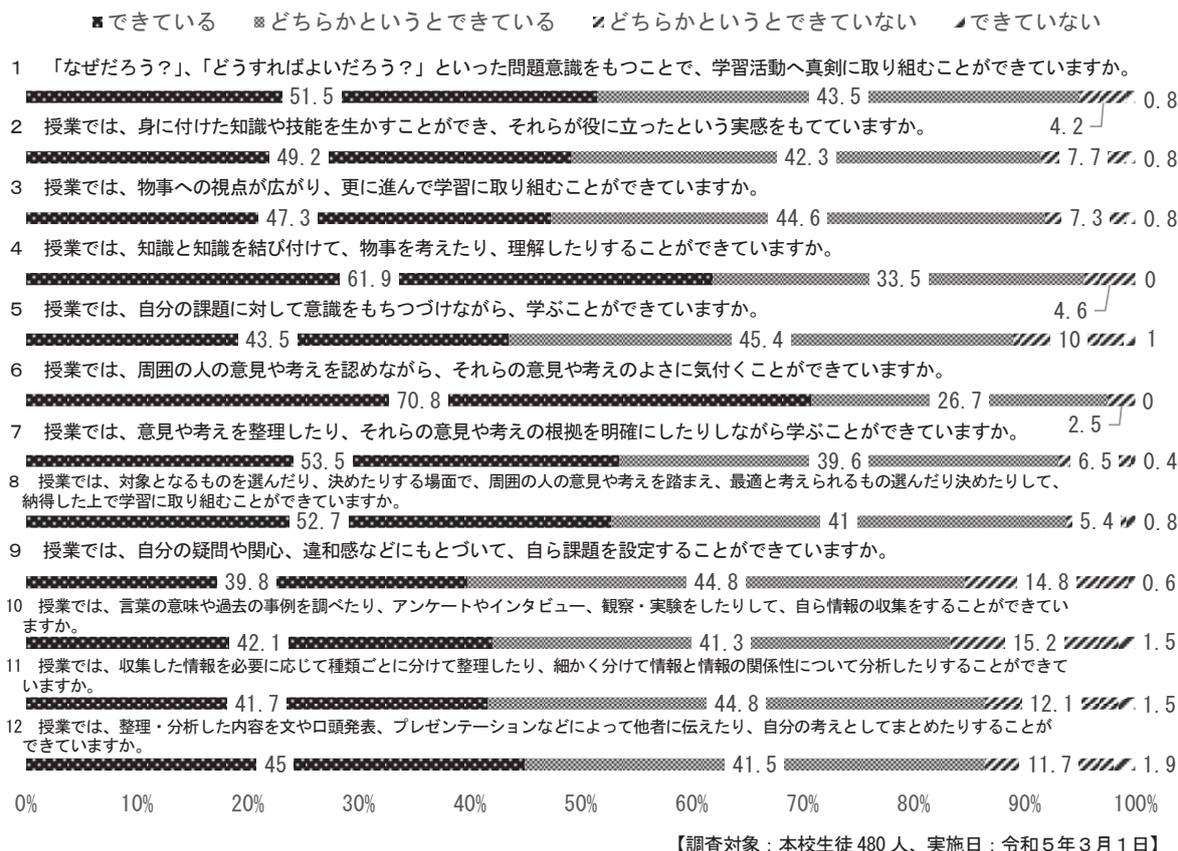


図 3 「探究的な学び」に関するアンケート調査の結果

4.2 研究の成果

○ 全てのアンケート項目において、「できている」、「どちらかというときできています」と回答した生徒が、8割以上いたことから、「ファシリテーションに着目した指導」が、生徒の「探究的な学び」を促進したり、支援したりする手立てになっていた可能性が高いことが推察される。

- 話し合い活動等において、質問の内容を工夫したり、他者の意見や考えを自分の意見や考えに取り入れたりしながら学ぼうとする生徒の姿が見られるようになった。
- 自他の意見や考えの関係性を構造的にノートや学習シート等へ書き出して、根拠を明確にしようとしながら思考する生徒の姿が見られるようになった。
- 多面的・多角的な視点をもって、選択したり決定したりすることは、よりよい課題(問題)の解決につながるものであることを理解する生徒が増えてきた。

4.3 研究の課題

- 生徒の学習状況を具体的に把握したり、ICTの効果的な活用方法を模索したりすることで、「ファシリテーションに着目した指導」の効果をより高められるようにしていく必要がある。
- 生徒の体験や経験と関連させた「探究的な学び」の実現を目指して、授業改善に取り組んでいくとともに、評価の在り方についても検討していく必要がある。
- 5年次の研究の課題を改善し、本校において育成を目指す生徒像に迫ることができるように、全職員でカリキュラム・デザインに取り組んでいく必要がある。

5. 主な引用・参考文献

文部科学省(2018)：Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～、Society5.0 に向けた人材育成に関わる大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース

総合科学技術・イノベーション会議(2022)：Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ

文部科学省(2017)：中学校学習指導要領解説 総則編、東山書房

文部科学省(2017)：中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編、東山書房

堀公俊(2021)：ファシリテーション入門〈第2版〉、日経文庫

田村学・佐藤真久(2022)：探究モードへの挑戦 高度化・自律化をめざすSDGs時代の人づくり、人言洞

石井英真(2020)：授業づくりの深め方「よい授業」をデザインするための5つのツボ、ミネルヴァ書房

諸富祥彦(2020)：いい教師の条件 いい先生、ダメな先生はここが違う、SBクリエイティブ

西岡加名恵・石井英真・田中耕治(2022)：新しい教育評価入門 [増補版]、有斐閣コンパクト

【付記】

本報告は、鹿児島大学教育学部附属中学校令和5年度の研究紀要で発表した内容に基づき、その内容を発展させ、その研究成果をまとめたものである。